

## ODA幻想 対中国政策の大失態

古森義久著 (海竜社・1600円+税)

# 日中友好に寄与したのか

1990年代、日本はODA（政府開発援助）において世界最大の規模を誇り「ODA大国」と呼ばれた。中国が圧倒的な対象国だった。北京を中心とした沿海部主要都市の交通インフラの基盤は、日本のODAがあつて日の目をみたといつてい。北京の国際空港や地下鉄を利用して建設されたものだということは知らないだろう。

どうしてなのか。日本人が知らないまでも、あれだけの大きさ

する日本人は少なくなかろうが、これらが日本のODAによって建設されたものだというこ

とは知らないだろう。

外交樹立の基本文書・日中共同声明で「戦争賠償の請求を放棄」どうたつた以上、中国は賠償とはいえない。賠償に感謝することは「矛盾」である。しかし、要するに賠償なのである。

著者は「日本からのODAはいつも戦後賠償なのだという認識は中國側では政府に限らず、国民レベルで存在した」という。そういう「認識」については私も何人かの中国の知識人から聞かされたことがある。

困ったことに、日本政府にとって対中ODAは賠償の「代償」なのである。日本側には資金を提供せねばならないのだ、という強迫観念のような切迫性」があつたと著者はいう。私もそう思う。

問われるのは対中ODAが「日中友好」に寄与したのかだが、まるで寄与していないといふ。反日暴動、反日イベント、尖閣諸島攻勢など友好とは正反対の方向に進んでいるのが現実だとみる。日中関係の現在が著者の優れたりアリズムを証しているではないか。

日本の対中ODAは1979年に始まり2018年をもって終了した。終了宣言が出されたのは18年10月の日中首脳会談においてであった。習近平・国家主席は40年にわたる巨額のODA供与に謝意を示すのかと思い

## ODA幻想 対中国政策の大失態

古森義久  
日本国民の血税  
骨感を育てた  
中国の

海竜社

評・渡辺利夫

(拓殖大学事顧問)